

# 水害直後における食生活調査

永原しず子

佐賀県農業試験場

NAGAHARA, S. Inquiry of Cooking Life  
after Flood Calamity

昭和28年度における水害後の農家生活については、色々な角度から取あげる問題は沢山あるが、泥水に20日以上も浮いた孤立地帯の食生活について調査に当つた。

## 1. 調査要領

### イ. 調査目的

水害時における生活の変化(特に食生活)とその被害及び部落民の健康状態を調査し、今後の生活のたてなおしを、農業経営に結びつけた農家自体の生活態度の改革に役立てたい。

### ロ. 調査期間

自 昭和28年7月1日

至 昭和28年8月1日

### ハ. 調査の場所と調査の方法

県下で最も大きい流域をもつ嘉瀬川上流の岸川堤防の決壊によつて、鍋島村1千戸が水浸しとなつたが、鍋島村で最も被害の大きかつた津留部落の食生活を中心に、村役場並に部落各戸にわたり調査に当つたが、健康調査については市保健所の協力を求めた。

## 2. 部落の概況

佐賀市から西北6kmの地点で、津留部落は鍋島村

の北位にあり嘉瀬川に面した小部落である。米麦2毛作の専業農家が多く、副業としては優秀な蔬菜畑をもち、佐賀市中央市場出荷量の過半数を占め、農家の経済状態は可なり良い方である。

	専業農家	兼業農家	非農家
部落戸数	14戸	3戸	4戸
〃人員	86名	16名	17名
平均耕作面積	18.96反	6.36反	
部落総面積	23.85町		

## 3. 水害による被害状況

部落戸数の23%が床上3尺の浸水、また58.8%が床上1尺、17.6%が床下浸水で82.4%の農家が20日以上も、床下浸水状態の生活がつづいた。また穀類の被害は平均60%以上で、日用品の被害は次の通りである。

	衣類	身廻品	寝具	家具	炊飯具	其他
流失	23.5%	29.4%	11.7%	23.5%	4.6%	
損害	27%	11.9%	6.3%	41.1%	35.3%	

## 4. 浸水中の食生活

## ① 動物蛋白質はどの様にしてとられたか

水害後1ヶ月間における動物蛋白質の摂取状態は、実に平常の12.5%位であり、大部分が救援物資であり、農家で購入したものを、摂取回数によつて3グループに区分した。

	戸数	摂取回数	購入回数	平均耕作面積
専業農家 <sup>↑</sup> A	8戸	1回～3回	4回(3戸)	17.48反
兼業農家 <sup>↓</sup>	2戸			
専業農家 <sup>↑</sup> B	5戸	5回～10回	10回(4戸)	16.95反
兼業農家 <sup>↓</sup>	1戸			
兼業農家 <sup>↑</sup> C	1戸	15回	11回	1反

この期間動物蛋白質が一般農家に殆んど摂取されなかつた原因は、部落全部が浸水しているため、行商人が部落にはいる事が出来なかつたことと、農家自体も特別の用件がない限り外出が容易でない為、兎角ありあわせであつたこと、また家族数の多少によりその摂取状態の差異も多少みられるが、この部落は畑作物の出荷による唯一の現金収入が絶たれた為とも云えよう。

尙、動物蛋白質の摂取内容と経営規模との関係は、今の場合関連性はうすい様であるが、水田や畑の被害の大きい程、精神的なものが経済問題とからみあい食生活の中をしぼっている事はたしかである。

## ② 有色野菜の摂取状態は

- A. 1ヶ月に1回も食べなかつた農家 12戸
- B. 1ヶ月に1回食べた農家 2戸
- C. 1ヶ月に2回食べた農家 2戸
- D. 1ヶ月に5回食べた農家 1戸

水害時における有色野菜の不足は、この部落に限らず絶命的なものであつたが、70.6%の農家が1ヶ月間に1回も摂取していない状態でもわかる。

また農家の畑が全部浸水している為、自給野菜の欠乏にもよるが、昔から野菜は売つても買つたことのない農家ばかりなので、いくら野菜がなくても購入すると云う事は考えられなかつた。

B農家では他人から貰つて摂取したもので、C農家では畑がいくらか分散している為2回だけ、D農家のものは、畑の被害が少なかつたので自給野菜を摂取する

事が出来た。

## ③ 水害直後の献立はこの様であつた

- 朝 梅干、沢庵
- 昼 いりこ、するめ(救助物資)
- 晩 馬鈴薯の煮メ

水害をうけた翌日から1週間位は、おにぎりやパン等の給与物で過し、それ以後は床下に浸水している為殆んど2階が炊事場となり、白米を持合せていない農家では玄米を1升瓶の中に入れて細い棒で精白する様な工夫もされた。

## ④ 飲料水は

水害当日から一番困つた事は飲料水である。飲み水は勿論であるが、浸水衣類の洗濯をするにも泥水ばかりで手がつかず、ほとんど腐つてしまつた。

少量の天水をバケツで取り家族全部で使用したが、1週間後には井戸が使用される様になつた農家から、貰水をした。

## ⑤ 水害直後の野菜は手が出なかつた

水害地でみる物価の変動は日用品のうちでも燃料をはじめ、佐賀県では蔬菜地帯の被害が多かつた為、水害前の2倍から2倍半以上も値上りした事は、一般の台所を暗くしたばかりか、これでは魚よりも野菜代の方がずつと上廻る形で、青野菜の摂取不足も余儀ないものであつた。

## 5. 部落民の水害による健康状態は

水害による悪条件の環境衛生の中に食生活の不都合が平行し、部落民の健康は72.8%の各症状が現われ、このうち44.8%が水虫、次が17.7%の夜盲症、それについて10.4%の胃腸障害の順となつている。

水害地における水虫の多い原因は湿度の高い関係もあるが、水の中を歩く時間が多い為とも云える。

なおビタミン不足による夜盲症も非常に多く、この事は部落民に有色野菜の効果を深く反省させた。この程度食物と栄養と云う事について農家自体が強く考えた事はあるまい。

## 6. 水害地の今後の生活をどの様に

耕地を所有して、そこにながく根をおろしている農民にとつて、たとえそこが如何に災害をうけようと転居、転職は容易に出来るものではない。半ば宿命的なあきらめの中から、復興に立ち上りつつあるが、水害による家財、生産場の被害、秋の収穫物の減収等、今後の苦しい生活が予想されるとき今後の生活のありかたとして次の様な問題点があげられる。

- ① 必要以上の衣服を制限する。
- ② 雑物を単衣物にして着る様にする。
- ③ 衣服の更生利用。
- ④ 丹前よりも毛布がよい。
- ⑤ たんす代りに茶箱を用いる。
- ⑥ 個人別、種類別に整理し明記しておく。
- ⑦ 一般農家に栄養常識の徹底をさせる。
- ⑧ 家庭菜園の計画栽培。
- ⑨ 米食依存の畝立改善。
- ⑩ 保存食、干物、乾物類の常備。
- ⑪ 調理技術の向上。
- ⑫ たたみじきを一部板の間にかえる。
- ⑬ 立体的に丈夫な柵を設備する。
- ⑭ 壁の下は必ず腰板にする。
- ⑮ 簡易水道の設置（部落共同でするとよい）
- ⑯ 床を高くして2階建または屋根裏を非常用に利用する様にする。
- ⑰ 改良かまどにする。石油コンロの設備。
- ⑱ 家財道具は最少限にとどめる。
- ⑲ 改良便所の設備（2階にも便所をつける）
- ⑳ 内庭をコンクリートにする。
- ㉑ 貯蓄心の昂揚。
- ㉒ 冠婚、葬祭の簡素化。
- ㉓ 余剰労力（生活、農業）の生産面への活用。
- ㉔ 生活を簡素、合理化して暇をうみだす。
- ㉕ 地域、家庭の実情に即した副業の導入により増収を図る。

## 7. 考 察

西日本一帯をおそつた台風、水害が全国的な気候変動のため農村の生産、生活両面の農家経済、保健面の被害もおびただしく、米麦の減収は直ちに粉食、麺類さては人造米さえ出現した。住居の面でも旧來のかま

どは殆んど流失し、余儀なく石油コンロを取入れて当面の生活の急場を忍んだ家もある。

しかしこの悲惨事によつて農村の根強い因習に鋭い自分のメスが与えられ、却つて生活改善の自主性は高揚されようとしている。食生活の面では栄養というものについての考え方を新にし、体験の結果から割出した反省を今後の実生活にとり入れる為の緒口ともなつた。今や国家は輸入食糧160万トンの中100万トンは小麦粉であるといわれているが、こうした立場から粉食の普及は当然国民全体の問題に考えられるであろう。国民経済と栄養改善の問題が高唱され、農林省は水害地の小学校へ給食施設をなし、農家の食生活改善へ発展せしめんとし、栄養改善と食糧問題の解決を目標に麺類、粉食の普及も要望されている。

## 8. 結 論

雨の生んだ水害の悲劇は実に眼にあまる絶望的な言葉による表現の限界をこえたものであつたが、水害によつて生活改善をすべき問題の内容が一般農家生活の各分野に大きく具体的に展開される絶好の機会であり、体験の生んだ新しい生活設計としてたてなおされるならば、不幸は転じて幸となり、今後の望ましい農家経済の力強いあり方ともなろう。

水害の程度や浸水期間によつても指摘される今後の対策内容も異なるが、特に食生活の実態を調査し、逆境に遭遇した苦い体験を通じ、個人の自覚と反省からスタートしたものがほしい。白米だけで生きてしまうと云う考から、生きた実例を肝に銘じ地域別、農業形態別に家畜の導入を計画し、動物蛋白質の補給と農家経済の立直しによつて、量の少ない今後の生活の工夫や、不必要な家財道具の掃蕩された事による簡素な生活を基盤とした、新しい生活様式が、水害地の足下から力強く生れてゆくことを期待するものである。